

アイドル歌謡 半世紀の変化

目次

- 1 はじめに
- 2 研究対象の選定
- 3 音声信号による比較
 - 3.1 音圧の変化
 - 3.1.1 仮説
 - 3.1.2 アイドルグループとソロアイドルの比較
 - 3.1.3 リマスターによる変化の検証
 - 3.1.4 音圧に関する検証 まとめ
 - 3.2 スペクトラム
 - 3.3 音声信号による比較 まとめ
- 4 歌詞の変化による分析
 - 4.1 「僕・君」の出現
 - 4.2 歌詞の内容の多様化
 - 4.2.1 80年代は「夏の渚の恋」の時代
 - 4.2.2 2000年代アイドルソングの歌詞は多種多様
- 5 グループアイドルへの変化と「没個性化」
 - 5.1 ソロアイドルからグループアイドルへ
 - 5.2 グループアイドルに見る「没個性」
- 6 結論

1 はじめに

筆者は 2000 年生まれであるが 80 年代のアイドル歌謡を聴くことが趣味である。同時に 2000 年代のアイドル歌謡を聴くこともあるが、その両者は同じ「アイドルソング」という分類でありながら曲調からマーケティングに至るまであらゆる部分が大きく異なっていて非常に面白いと感じると同時に、この違いが研究対象になるのではないかと考えた。

そこで、筆者はこれまでの文系教養科目において 2 度、音楽についての研究を行ってきた。「言語学 A」においては様々なジャンルの曲を対象とし、歌詞の時間当たりの文字数が、時代が進むにつれて増加していることを明らかにした。また、「表象文化論 B」においては 18 歳で自ら命を絶った、80 年代を代表するアイドルの一人である岡田有希子に着目し、社会が岡田有希子に与えた影響について考察した。

このように、これまでは幅広いジャンル・時代を対象とした研究、及び特定の歌手に着目した研究を行ってきたが、今回はジャンルをアイドル歌謡に絞り、主に 80 年代と 2000 年代の 2 つの時代に着目して研究を行う。具体的には、80 年代のアイドル歌謡と 2000 年代のアイドル歌謡を比較し、その違いを明らかにすることで流行の変化に対して何らかの傾向を見出し、その変化の意味を明らかにすることを目標とする。

ジャンルをアイドル歌謡とした理由は、アイドルのような「低俗な」大衆文化は、批評家の大塚英志氏が「シミュラクル・アイドル」と表現し、その記号性を指摘しているように [1, p. 46] 各時代における大衆の欲望を具現化した存在であり、アイドルソングの変化を研究することで人々の欲望がどのように変化してきたのか、すなわち流行の変化に対する傾向を明らかにすることができると考えたからである。時代を 80 年代と 2000 年代とした理由は、バブル崩壊前後で日本人の価値観が大きく変化したのではないかと考えたからである。

2 研究対象の選定

大衆文化、すなわち多数の人の平均的な趣向を研究するためにはなるべく様々なアーティストの多数の楽曲を研究対象とすることが望ましいが、大量の楽曲を購入するためには多額の費用が必要となる。そこで本論文では筆者が既に所有している楽曲のうち、客観的に見て大衆に広く受け入れられた、すなわちヒットした楽曲を主に対象とし、そうでない場合は対象とした理由を明記することとした。

3 音声信号による比較

この章では、時代による音楽の変化を音楽ファイルの波形を用いて分析する。ここで、波形の分析にはオープンソースの音声編集ソフトである Audacity 3.1.3 を用いた。音源は CD、あるいは音楽配信サービスからダウンロードしたファイルを用いた。

3.1 音圧の変化

3.1.1 仮説

まず初めに、以下の4つの波形を見ていただきたい。

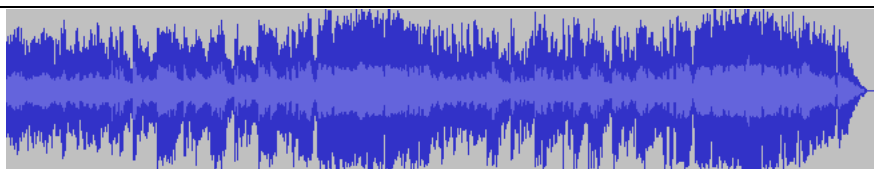


図 1 山口百恵『秋桜』(1977)

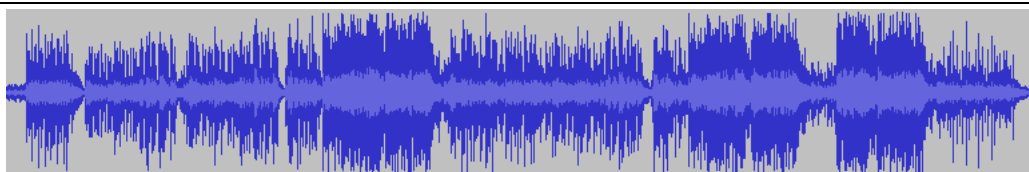


図 2 岡本舞子『11月のソフィア』(1986)

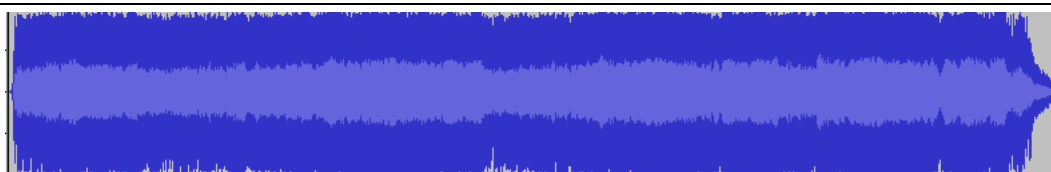


図 3 AKB48『11月のアンクレット』(2017)

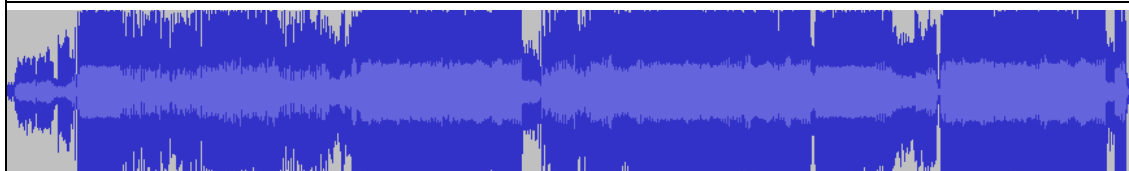


図 4 ももいろクローバーZ『サンタさん-ZZ ver.-』(2020)

これらの波形はすべて同じ縮尺であるにもかかわらず、上の2つは波形に強弱が見られるのに対して下の2つは一般に「海苔波形」と呼ばれる、波形にほとんど強弱が見られない状態となっており、大きな差があることがわかる。

ここで、比較対象としてこれらの曲を選んだ理由を説明する。図1に示した山口百恵『秋桜』はTBSのランキング番組「ザ・ベストテン」¹（以下「ベストテン」）において10位以内にランクインしたことはなかったが、2006年に文化庁が選定した「日本の歌百選」に選ばれている[2]ことからわかるように現代まで歌い継がれる名曲であるということから

¹ 1978年から1989年にかけてTBS系列で放送された、独自の邦楽ランキングを俗に言う「パタパタ」を使って発表する番組で、最高視聴率41.9%を記録するなど圧倒的な人気を誇った。

1970 年代の代表的な曲として選定した。図 2 に示した『11 月のソフィア』は大流行した曲とは言えないが、図 3 で示した『11 月のアンクレット』と作詞者が同じ（秋元康）であること、及び曲名が類似していることから時代による変化を見るのに適していると考えて選定した。図 3 に示した『11 月のアンクレット』は第 68 回 NHK 紅白歌合戦において「視聴者が選んだ夢の紅白 S P メドレー」において 1 位に選ばれる [3] など当時人気が高かったとして選定した。図 4 に示した『サンタさん-ZZ ver.-』は、秋元康プロデュースではないアイドルグループの曲として、選曲による偏りを防ぐために選定した。

これらの比較結果から、アイドル歌謡は時代が進むにつれて波形の強弱がなくなり常に最大音量に近い時間が多くなる、すなわち音圧が大きくなっているのではないかという仮説が導き出される。この仮説を検証するために、更なる比較を続ける。

3.1.2 アイドルグループとソロアイドルの比較

先程の比較において、2000 年代アイドル歌謡の代表例として選定した 2 曲は共にグループアイドルの曲であったため、時代の変化ではなくそれが原因で音圧が大きくなっていた可能性がある。そこで、ここでは先程の比較で登場した AKB48 とプロデューサーが同じ秋元康であり、80 年代を代表するアイドルグループである「おニャン子クラブ」、及び 2000 年代に活動したソロアイドルである「松浦亜弥」の楽曲を用いて検証する。

比較に用いる楽曲は、おニャン子クラブの代表的な楽曲であり、ベストテンにおいて第 5 位を獲得した『セーラー服を脱がさないで』、及び松浦亜弥の代表的な楽曲であり、一般社団法人 日本レコード協会からゴールドディスク認証（旧基準、累計正味出荷枚数 10 万枚以上）を受けている [4] 『桃色片思い』を選定した。

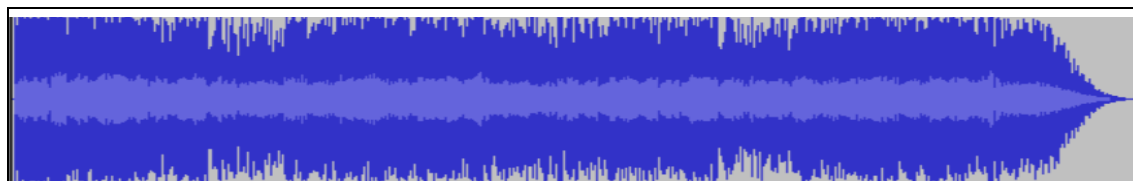


図 5 おニャン子クラブ『セーラー服を脱がさないで』（1985）

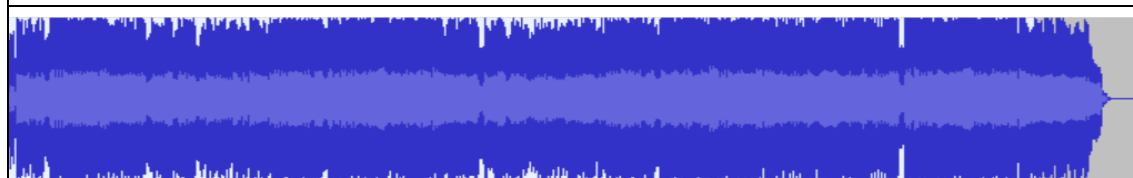


図 6 松浦亜弥『桃色片思い』（2002）

図 5 は図 1 や図 2 と比べれば波形の起伏が少ないものの、波形が塗りつぶされていない部分が明確に存在していることがわかる。また、図 6 は一部波形が塗りつぶされている部分があるものの起伏が明確に読み取れる部分も存在し、ちょうど図 2 と図 3 の中間のような傾向を示している。

これらの結果から、グループアイドルの曲、ソロアイドルの曲の両方において時代が進むにつれて音圧が上昇する傾向があることがわかる。

3.1.3 リマスターによる変化の検証

本論文を執筆するにあたり、発売当時はレコードであった曲についてはリマスター音源を用いているためレコード音源とは異なる可能性があり、検証が必要である。また、同じ曲のリマスタリングされた時期による変化を調べれば、より選曲による偏りのない検証が可能となる。

そこで、紅白歌合戦に6回出場し [5]、現在でも根強い人気を誇る 80 年代を代表するアイドルの一人である河合奈保子の楽曲『ハーフムーン・セレナーデ』(1986,ベストテン第7位 [6]) を例に、リマスタリングによる音圧の変化を検証する。検証に用いた楽曲は、1986年に発売されたアルバム『スカーレット』の、発売当時の CD からリッピングした『ハーフムーン・セレナーデ』と、2010年に発売されたベスト盤『河合奈保子 ゴールデン☆ベスト』からリッピングした同曲である。前者の波形を図 7 に、後者の波形を図 8 に示す。これら2つの CD はレーベルが同一(日本コロムビア)であるにもかかわらず、同じ曲であっても2010年に発売された曲の方が波形の振幅が大きくなっていることがわかる。

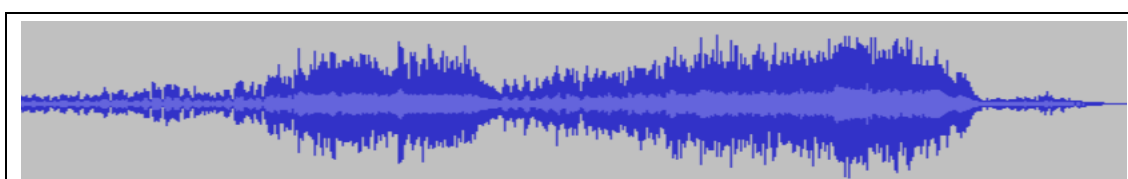


図 7 河合奈保子『ハーフムーン・セレナーデ』(1986 年発売の CD より)

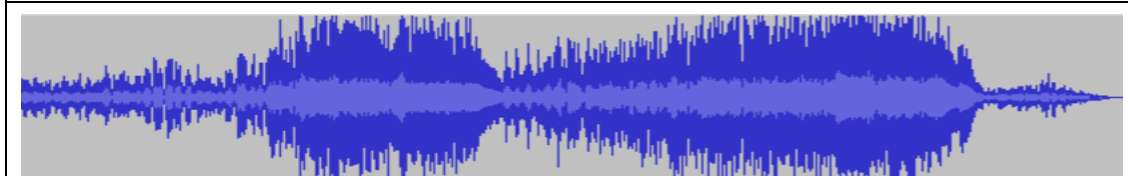


図 8 河合奈保子『ハーフムーン・セレナーデ』(2010 年発売の CD より)

さらに、小泉今日子『水のルージュ』(1987,ベストテン第3位)についても、1987年発売の CD『Phantasien』に収録された音源と、2012年発売の CD『Kyon30～なんてったって30年!～』に収録された音源で検証を行った結果、同様の傾向が確認された。

これらの結果から、同じ曲であっても発売された時代が進むにつれて音圧が上昇する傾向があると判断できる。

3.1.4 音圧に関する検証 まとめ

以上の検証より、アイドル歌謡の音圧は時代が進むにつれて上昇する傾向が見られ、特に 2000 年代に入ってから波形が塗りつぶされてしまうような音圧が非常に高い曲も出現していることがわかる。

3.2 スペクトラム

様々な楽曲を聴き比べていると、時代が進むにつれて低音成分が強くなり、派手な仕上がりの曲が増加しているように感じた。そこで本節では音声信号の周波数成分に着目し、時代によって曲のスペクトラムがどのように変化してきたかを検証する。

検証に用いる曲は 3.1.1 で用いた曲と同じとした。次の図 9～図 12 に、各曲のスペクトラムを表示する²。これらの図において昭和期の曲（図 9・図 10）と 2000 年代の曲（図 11・図 12）を比較すると、以下のような傾向が読み取れる。

- 昭和期の曲はスペクトラムのピークが 200Hz 付近であるのに対して、2000 年代の曲はピークが 50Hz 前後と低い位置にある。
- 昭和期の曲は 200Hz 付近のピークを境に低域・高域成分共に急速に減少する山なりのカーブを描いているのに対して、2000 年代の曲は可聴域の下限とされる 20Hz から 2kHz 前後までの広い範囲に平坦な領域が広がっている。
- 2000 年代の曲、特に図 12 において 50Hz 付近に意図的に持ち上げられたようなピーク（図中に円で囲って示した）が存在する。

50Hz は可聴域の下限とされる 20Hz にかなり近く、実際に 50Hz の音を再生するとかなり低い音であったことから、2000 年代の曲は低音が重視されていることがわかる。

² 図 9 と図 10 はファイル形式が AAC 192kbps、図 11 と図 12 が AAC 320kbps であるため図 9・図 10 の高域特性が若干悪化しているが、今回は低域成分に着目するため問題ないと判断した。

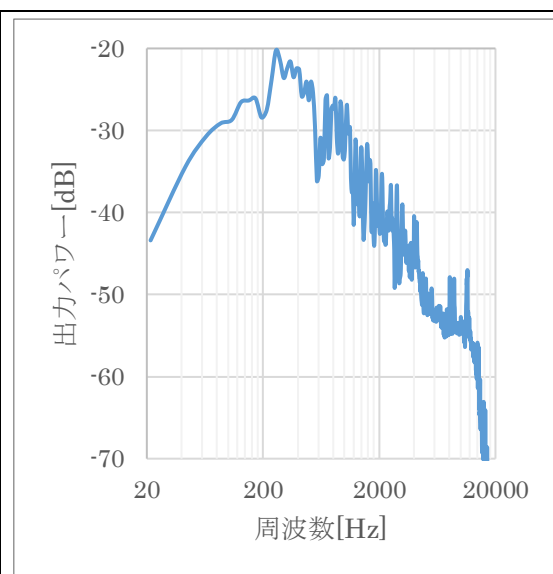


図 9 山口百恵『秋桜』

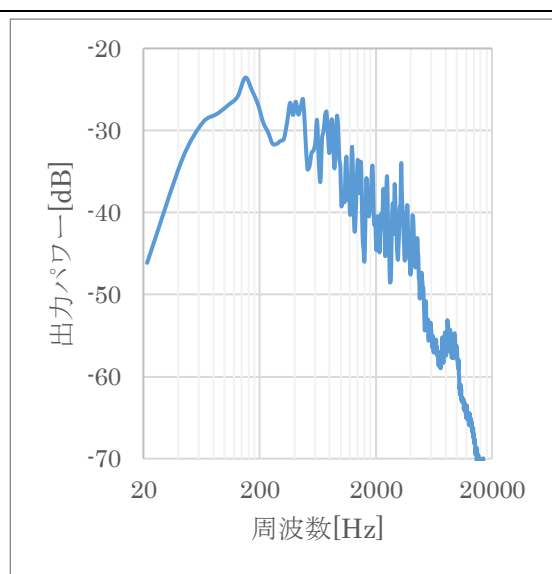


図 10 岡本舞子『11月のソフィア』

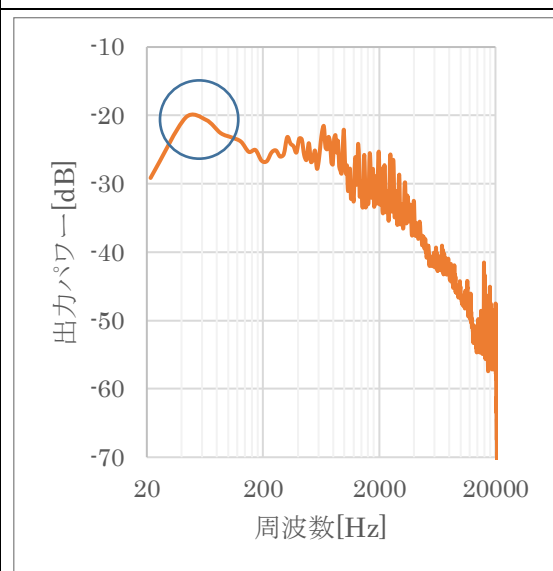


図 11 AKB48『11月のアンクレット』

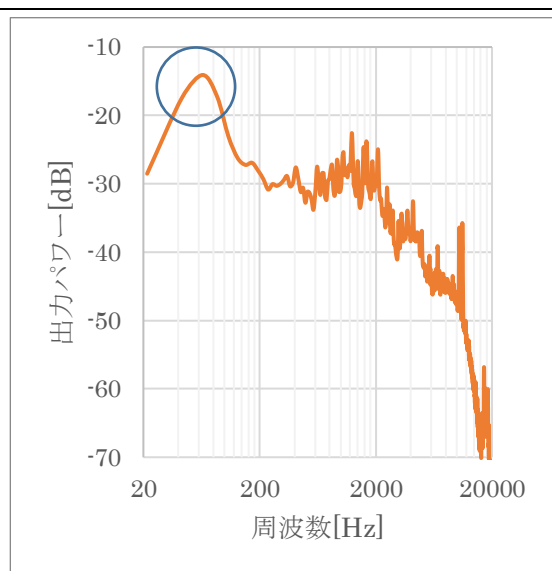
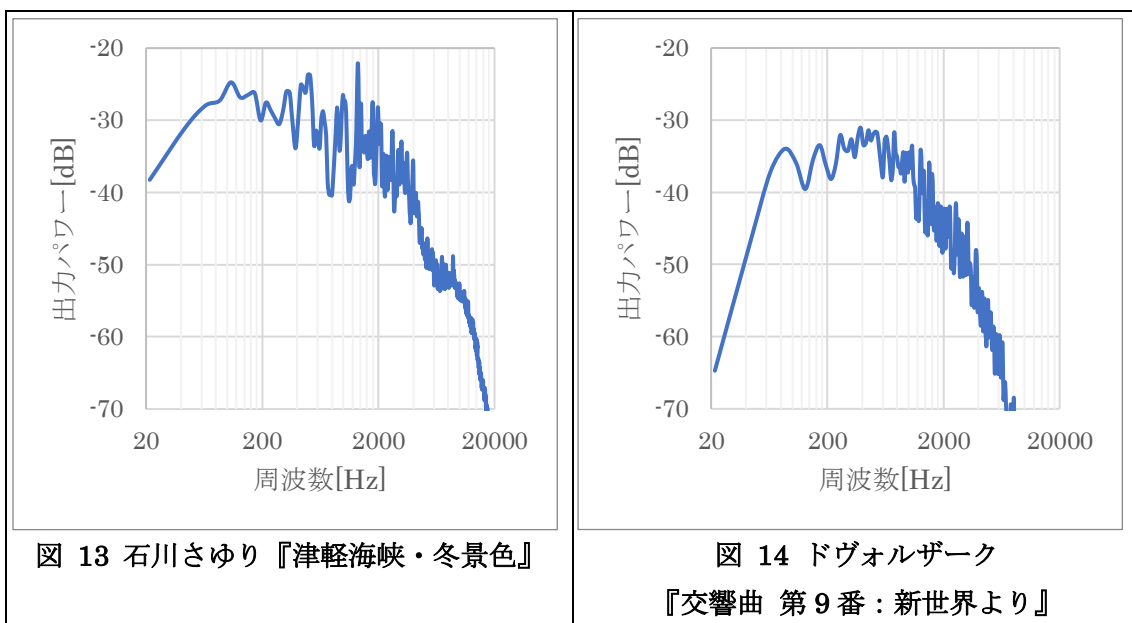


図 12 ももいろクローバーZ
『サンタさん-ZZ ver.-』

また、これらの結果を考察するために、一般にポピュラー音楽と比較して伝統的であり芸術性が高いと考えられる曲として演歌から石川さゆり『津軽海峡・冬景色』（1977）を、クラシック音楽からドヴォルザーク『交響曲 第9番：新世界より』（レオポルド・ルードヴィヒ&ロンドン交響乐团による演奏）を選び、それぞれの曲のスペクトラムを次の図 13・図 14 に示す。



これらの比較対象はいずれも山なりのカーブを描いており、図 9～図 12 と見比べると昭和期の曲は 2000 年代の曲と比較して演歌やクラシック音楽に近いと考えられる。

3.3 音声信号による比較 まとめ

以上の結果から、2000 年代の曲は [7]において大塚氏が「じっくり歌詞に聞き入るといふより、サウンド重視型の曲が増加した」と述べているように、昭和期の曲と比較して低域や中域成分を持ち上げて、自然な聞こえ方よりも低音の響きや音の成分の多さを重視し、さらに波形が歪むほど音圧を上げた派手な仕上がりの曲が増加しているといえる。

4 歌詞の変化による分析

次に、歌詞の内容の時代による変化を考察する。

4.1 「僕・君」の出現

筆者が歌詞の時代変化のうち、最も顕著であると考えるのは女性アイドルが歌う歌詞において「僕・君」という単語が増加することである。

80 年代アイドルソングの歌詞は、一人称が「私」（歌手自身）、二人称が「あなた」であるものがほとんどである。3.1.3 でも登場した河合奈保子を例にすると、筆者が所有する全 162 曲のうちで明確に男性が主人公となっている曲は一切存在せず、歌詞をデータ化している 83 曲においては歌詞中に「僕・ボク」や「君・キミ」という単語が存在していないことが確認できた。また、同じく 80 年代を代表するアイドルの一人である岡田有希子のベスト盤『ゴールデン☆アイドル 岡田有希子』に収録された全 18 曲や、早見優のベスト盤『早見優 ゴールデン☆ベスト』に収録された全 18 曲についても同様の結果が得られた。

一方、2000年代のアイドルソングでは「僕・君」という単語の歌詞への出現が増加しており、中には女性シンガーであるにもかかわらず一人称が男性である曲も、特にAKB48を中心に出現している。例えば3.1.1で例示したAKB48『11月のアンクレット』は主人公が男性であり、一人称は「僕」、二人称は「君」である。同様の傾向は、同じくAKB48の次のような曲においても見られる。

- 『ヘビーローテーション』(2010)
- 『#好きなんだ』(2017)
- 『快速と動体視力』(2013)

また、他のアーティストの曲でも次に例示するような「二人称が君（キミ）」である曲が多数見られる。

- ももいろクローバー『行くぜっ！怪盗少女』(2010)
- ももいろクローバーZ『全力少女』(2011)
- きゃりーぱみゅぱみゅ『にんじやりばんばん』(2013),『もんだいガール』(2015)
- NiziU『Make you happy』(2020)

このように、80年代の曲はほとんどが「一人称が私・二人称があなた」であるのに対して、2000年代の曲では「二人称が君（キミ）」の曲が容易に見つかるようになり、さらに一人称が「僕」である曲も登場していることがわかる。

4.2 歌詞の内容の多様化

次に、歌詞の具体的な内容に着目し、時代が進むにつれて歌詞の内容が多様化するという傾向について議論する。

4.2.1 80年代は「夏の渚の恋」の時代

まず、80年代アイドルソングの歌詞を視覚的に表したものとして1枚の画像を示す。



図 15 河合奈保子『夏のヒロイン』(1986,ベストテン第3位) [6]

この画像は河合奈保子のベストテンにおける歌唱シーンを切り取ったものであるが、いかにも女の子らしいメルヘンチックな衣装を着用し、背後にはイルカのバルーンと青色の風車が配置されて「夏」の雰囲気を演出している。また、歌詞は次のように絵に描いたような「女の子があこがれる夏の渚の恋」を歌うものである。

青い渚 急に駆け出しながら 突然言うのね 君が好きだなんて
(河合奈保子『夏のヒロイン』 作詞：竜真知子)

[7]において大塚氏は「1980 年代前半は、全面的に「夏の渚の恋」を謳歌する時代だった」と述べているが、この曲の歌詞には「夏」「渚」「恋」という単語がすべて含まれており、図 15 と併せて 80 年代アイドルソングの特徴を非常によく表している。

この例のように、80 年代アイドル歌謡は「女性目線で描いた、メルヘンチックな恋愛ソング」が非常に多い。この傾向を検証するために、4.1 で登場した岡田有希子のベスト盤『ゴールデン☆アイドル 岡田有希子』に収録された全 18 曲の曲名を次の表 1 に示す。

表 1 『ゴールデン☆アイドル 岡田有希子』曲名一覧 [8]

曲番号	曲名	曲番号	曲名
1	ファースト・デート	10	星と夜と恋人たち
2	そよ風はペパーミント	11	哀しい予感
3	リトルプリンセス	12	恋人たちのカレンダー
4	恋のダブルス	13	Love Fair
5	-Dreaming Girl- 恋、はじめまして	14	二人のブルー・トレイン
6	気まぐれ Teenage Love	15	くちびる Network
7	二人だけのセレモニー	16	恋のエチュード
8	PRIVATE RED	17	花のイマージュ
9	Summer Beach	18	秘密のシンフォニー

この表を見ると、18 曲中 5 曲には曲名に「恋」という単語が使われ、それ以外の曲名についても「デート」や「二人」といった恋愛を想起させる単語が使われていることがわかる。実際、これら 18 曲はすべて「女性目線で描いた恋愛ソング」である。さらに、歌詞の内容も単純で、次のようにメルヘンチックなものがほとんどである。

私はいつでもあなただけのプリンセスよ このまま手を取りおとぎの国へ連れてって
(岡田有希子『リトルプリンセス』 作詞：竹内まりや)

これほどまでにメルヘンチックな曲が多いのは岡田有希子であることに起因する部分も大きい。3.1.2 で登場した 80 年代のグループアイドルであるおニャン子クラブの曲を例にとっても大抵は「女性が主人公の恋愛ソング」であることに変わりはなく（おニャン子

クラブの場合はそれに「お色気ソング」が加わるが³⁾、80年代のアイドル歌謡のほとんどは「メルヘンチックな恋愛ソング」であり、歌詞の内容が単純で個性が少ないと言えよう。

4.2.2 2000年代アイドルソングの歌詞は多種多様

一方、昨年の紅白歌合戦にも出場した [5]人気アイドルグループである乃木坂 46 のカラオケランキングを見てみると、次のように「恋」という単語はない。

表 2 乃木坂 46 カラオケランキング [9]

順位	曲名
1	サヨナラの意味
2	インフルエンサー
3	シンクロニシティ
4	ごめんね Fingers crossed
5	帰り道は遠回りしたくなる
6	ガールズルール
7	夜明けまで強がらなくてもいい
8	裸足で Summer
9	ジコチューで行こう！
10	I see…

同時に、歌詞の内容は次のように情緒的なものが多く、メルヘンチックな恋愛ソングとは全く異なるものになっている。

きっと 誰だって 誰だってあるだろう ふいに気づいたら泣いてること

(乃木坂 46『シンクロニシティ』 作詞：秋元康)

さらに、表 2 中に太字で示した 8 曲は一人称が「僕」であり、例えば『素足で Summer』の歌詞中に

近くにいつも 大勢いるよ 男友達 その中の一人が僕だ

(乃木坂 46『素足で Summer』 作詞：秋元康)

とあることから、これは「男性目線で描いた恋愛ソング」であると考えられる。

³⁾ おニャン子クラブは、そのグループ名や、代表的な曲が「セーラー服を脱がさないで」であることなどからもわかるように安直で下品な性的表現を特徴としたグループであり、歌詞の内容は洗練されておらず単純である。

また、4.1 で登場したももいろクローバーZ『全力少女』の歌詞を見ると、次のように女性から見た男性の呼称として「キミ」が用いられていることがわかる。

全力で キミの事だけ思うよマジで 恋したからっ！

(ももいろクローバーZ『全力少女』 作詞：前山田健一)

この傾向から、4.1 で論じた「僕・君」の増加を考察することができる。すなわち、80年代アイドル歌謡は女性が主人公の恋愛ソングがほとんどであったため一人称は「私」であり、二人称は古典的な異性の呼び方として「あなた」が用いられていた。しかし、時代の変化とともに男性目線の楽曲も出現し、また女性から見た男性の呼び方として古典的な「あなた」よりも「キミ」といった言葉が使われるようになったため「僕・君」が増加したと考えられる。実際、さらに時代を遡って戦前の流行歌に目を向けても、恋愛ソングといえば「女性が男性に熱い想いを訴えるという構造にある」[7, p. 62]ようであるから、これらの変化は古典的な性別に関する固定観念が取り払われつつある現代に特有のものであると考えられる。

5 グループアイドルへの変化と「没個性化」

最後に、ソロアイドルからグループアイドルへの変化について検証し、アイドル歌謡における「没個性化」について考察する。

5.1 ソロアイドルからグループアイドルへ

まず初めに、ソロアイドルの消滅とグループアイドルの増加について、紅白歌合戦出場歌手を例に検証する。

次の表 3 に「花の'82 年組」⁴が登場した年である 1982 年と、直近である 2021 年の紅白紅組出場歌手一覧を示す。この表では、ソロアイドルを太字、グループアイドルを斜体赤字で示している。ここで、特にソロアイドルの定義はアイドル歌手から演歌歌手やシンガーソングライター等に転向する場合があることや、アイドル歌手ではない歌手がアイドルの人気を博す場合もあるため難しいが、ここでは歌唱当時に一般にアイドルと呼ばれていたことに加え次節に示すような容姿を強調したジャケットを持つレコード・CD をリリースしていたこととした。この結果より、1982 年はソロアイドルが多く登場しているのに対して 2021 年はソロアイドルが消滅し、グループアイドルが多く登場していることがわかる。

⁴ 1982 年は石川秀美、小泉今日子、早見優といった多くの人気アイドルが登場した年であり、一般にこのように呼ばれる。[13, p. 181]

表 3 紅白出場歌手の時代変化

1982	2021
三原 順子	LiSA
河合 奈保子	<i>NiziU</i>
あみん	<i>櫻坂 46</i>
高田 みづえ	Awesome City Club
松田 聖子	<i>日向坂 46</i>
水前寺 清子	天童よしみ
シュガー	上白石萌音
研 ナオコ	milet
ロス・インディオス&シルビア	水森かおり
青江 三奈	AI
島倉 千代子	BiSH
牧村 三枝子	<i>Perfume</i>
榊原 郁恵	millennium parade × Belle (中村佳穂)
小柳 ルミ子	<i>乃木坂 46</i>
桜田 淳子	坂本冬美
川中 美幸	YOASOBI
岩崎 宏美	あいみょん
森 昌子	東京事変
石川 さゆり	薬師丸ひろ子
小林 幸子	石川さゆり
八代 亜紀	MISIA
都 はるみ	

5.2 グループアイドルに見る「没個性」

この変化の意味を考察するために、ここからはソロアイドルとグループアイドルにおけるマーケティングの違いを検証し、グループアイドルに見る「没個性」について考察する。

まず初めに、以下の4つの画像を見ていただきたい。



図 16 AKB48 [14]



図 17 STU48 [15]



図 18 ももいろクローバーZ [16]



図 19 NiziU [17]

これらの画像はいずれも 2000 年代のアイドルグループの MV、あるいはジャケット写真である。（ファンの方々には申し訳ないが）これらを見て「グループ名は知っているけれどメンバー名はほとんどわからない」「画一的でみな同じようだ」と感じる方が多いのではないだろうか。

特に図 16・図 17 で示した秋元康プロデュースのアイドルグループ 2 つは、すべてのメンバーがほとんど同じ衣装を着用し、全体を引きで撮っているため非常に画一的な印象を受ける。また、メンバー数が非常に多いためそのすべてを把握しているという人は少数であろう。

また、図 18・図 19 においてはメンバーの「色分け」がなされていることが特徴的である。特に図 19 においては各メンバーの衣装のみならず、メンバーが入っている「部屋」にまで色分けがなされており、明確にメンバーカラーを意識していることがわかる。このようなメンバーの色分けは 2000 年代のアイドルで多く見られるが⁵、その結果として各メンバーの印象が「色」という要素に単純化されると考えられる。

⁵ TWICE、私立恵比寿中学、でんぱ組.inc など

最も、80年代アイドルのプロフィールは [10, p. 4]において『アイドルは、恋人がいても「いない」、焼き鳥や塩辛が好きでも「プリンやクレープが好き」とコメントし、(中略)プロフィールを虚偽報告して』と述べられていたり、筆者のレポートにおいても「いささか没个性的に見える」と述べていたりするように [11, p. 3]「不自然なまでに女の子らしい、ありきたりなプロフィール」が多いため個性が尊重されていたわけではなく、比較の問題ではないことには注意が必要であるが。

さらに、グループアイドルについても80年代は現在より各メンバーの個性が重視されていたように筆者は感じる。その典型的な例として、3.1.2で80年代を代表するアイドルグループとして登場したおニャン子クラブの楽曲『会員番号の唄』を取り上げる。これは1986年に発表されたおニャン子クラブの中でも比較的知名度の高い楽曲であり、その内容は次のように各メンバーが各々の自己紹介をリズムに乗せて順番に歌うというものである。

会員番号8番 国生さゆり

はっきり言っときますけれどクニナマサユリじゃありません⁶

ハンパなおっかけもうしないでね

(おニャン子クラブ『会員番号の唄』 作詞：秋元康)

おニャン子クラブは数十人に上る規模の大きいグループであったが、この曲が各メンバーの名前と個性を強く印象付けることに役立った。最近のグループにおいてこのような自己紹介を行う曲は少なくとも人気になった曲の中では確認されていない。また、ソロアイドルがほぼ消滅した2000年代とは異なり、グループ卒業後もソロアイドルとして人気を博したメンバーも多く⁷、グループとしてはもちろんのことメンバー一人一人に対する注目も高かったと考えられる。

以上の比較からわかることは、2000年代のグループアイドルは80年代のアイドルと比較してメンバー一人一人の個性への注目がされづらくなり、グループとしての統一感が重視され個人としての個性が失われつつある、すなわち「没个性的」になりつつあると言える。

⁶ 正しくは「こくしょう」であり、これをよく「くになま」と読み間違えられたことを歌っている。それ以外のメンバーについても「東京在住」「実家は自転車屋」など、非常に個人的な特徴が歌われている。

⁷ 工藤静香、河合その子、国生さゆりなどが代表的である。これらのメンバーはソロとしても様々なドラマに出演したり、音楽チャートで1位を獲得したりと高い人気を誇った。

6 結論

以上より、アイドル歌謡は特にジェンダーに関する固定観念の減少に伴って歌詞の多様化が進んでいることがわかるが、一方で曲調はより派手に・より目立つように変化してきたことがわかる。また、ソロアイドルがほぼ姿を消し、グループアイドルがその勢力を拡大していることがわかるが、この傾向からアイドルの没個性化が進んでいることが読み取れる。

歌詞は複雑になっているにもかかわらず曲調は派手さを意識したものになっている理由として、膨大な数の娯楽コンテンツが提供されるようになった中で目立つ必要が高まり、特に第一印象が重要視されるようになったからではないかと考えられる。例えば、YouTube を代表とする個人向けの動画配信サービスではサムネイルが再生数に大きな影響を与え、時に内容を伴わないものの目を引くサムネイル（いわゆる「釣りサムネ」）の動画が再生数を稼ぐことも多い。また、web ページは検索された際に表示されるタイトルが非常に重要な役割を果たしている。それ以外にも、個人研究ではあるがライトノベル作品のタイトルが年々長くなっているとの調査結果もあるように [12]、コンテンツの中身そのものよりもタイトルやサムネイルといった第一印象の重要度が高まっていることがわかる。

また、「没個性化」は一般に個性の尊重が叫ばれる現代の情勢と矛盾しているように感じるが、これはアイドルが未だに人々の理想を具現化した記号的な存在—「シミュラクル・アイドル」に過ぎず、個性を出すことよりも人々の思い描く理想像を「演じる」ことが求められていることを表しているのではないだろうか。このような矛盾は「有名人だから仕方ない」と考えられる部分もあるが、一方でインターネットの出現により一般の人が有名人となる機会が増大し、有名性が偏在化するようになった現代においてはより多くの人に影響を与える可能性があり、更なる議論が必要であると考ええる。

➤ 参考文献

- [1] 大塚英志, 「おたく」の精神史, 星海社, 2016.
- [2] 世界の民謡・童謡, “日本の歌百選 曲目一覧まとめ,” [オンライン]. Available : [http : //www.worldfolksong.com/songbook/japan/nihon-uta100.html](http://www.worldfolksong.com/songbook/japan/nihon-uta100.html). [アクセス日 : 12 01 2022].
- [3] keinosora, “2017NHK 紅白歌合戦 (3) AKB 48 編★夢の紅白SPメドレー,” 05 01 2018. [オンライン]. Available : [http : //blog.livedoor.jp/keinosora/archives/51342840.html](http://blog.livedoor.jp/keinosora/archives/51342840.html). [アクセス日 : 12 01 2022].
- [4] 一般財団法人 日本レコード協会, “統計情報: ゴールドディスク認定,” 10 12 2021. [オンライン]. Available : [https : //www.riaj.or.jp/f/data/cert/gd.html](https://www.riaj.or.jp/f/data/cert/gd.html). [アクセス日 : 12 01 2022].
- [5] 日本放送協会, “紅白歌合戦ヒストリー,” 2021. [オンライン]. Available : [https : //www.nhk.or.jp/kouhaku/history/](https://www.nhk.or.jp/kouhaku/history/). [アクセス日 : 12 01 2022].
- [6] *NAOKO ETERNAL SONGS*. [録画物]. 日本 : 日本コロムビア, 2020.
- [7] 大塚明子, “大衆音楽におけるキーワードの長期的推移,” 文教大学大学院言語文化研究科附属言語文化研究所, 2005.
- [8] 岡田有希子, 作曲者, ゴールデン☆アイドル 岡田有希子. [録音物]. ポニーキャニオン. 2014.
- [9] JYOSOUND, “乃木坂 46 の人気曲ランキング,” [オンライン]. Available : [https : //www.jyosound.com/web/search/artist/232133/ranking](https://www.jyosound.com/web/search/artist/232133/ranking). [アクセス日 : 12 01 2022].
- [10] 昇. 西条, 英. 木内, 康. 植田, “アイドルが生息する「現実空間」と「仮想空間」の二重構造,” 江戸川大学紀要, 2016.
- [11] 上田, “表象文化論 B レポート 岡田有希子の自死から我々が学ぶこと,” 2020.
- [12] ねとらぼ, “ラノベのタイトルが長くなったのはいつ頃か? タイトル文字数の長さを年別分布にした図表が興味深い,” ITmedia Inc., 18 2 2019. [オンライン]. Available : [https : //nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1902/18/news067.html# : ~ :](https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1902/18/news067.html# : ~ :)

text=1990%E5%B9%B4%E4%BB%A5%E9%99%8D%E3%80%8110%E6%96%87
%E5%AD%97,%E3%82%8B%E3%81%AE%E3%81%8C%E3%82%8F%E3%81%8
B%E3%82%8A%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82. [アクセス日 : 30 01
2022].

- [13] 竹内義和, 清純少女歌手の研究, 青心社, 1987.
- [14] #好きなんだ <Type D>. [録画物]. KING RECORDS, 2017.
- [15] 風を待つ [CD+DVD] <通常盤<Type D>>. [録画物]. KING RECORDS, 2019.
- [16] Stardustdigital, “【ももクロ MV】 行くぜっ! 怪盗少女 / ももいろクローバーZ,”
29 04 2010. [オンライン]. Available : [https :
//www.youtube.com/watch?v=u7z9M0vFPbI](https://www.youtube.com/watch?v=u7z9M0vFPbI). [アクセス日 : 19 01 2022].
- [17] T. R. Online, “タワーレコード オンライン ニュース,” 07 09 2021. [オンライン].
Available : [https :
//tower.jp/article/news/2021/09/07/tg007](https://tower.jp/article/news/2021/09/07/tg007). [アクセス日 : 19 01
2022].